

見て見ぬふり

太田市立太田中学校 二年 長島 由依

小学生の時、落ちているゴミを見て見ぬふりをするような人間は、いずれ大きな問題が起きたときも自分は知らないというように見えて見ぬふりをする人間になってしまおうと、あの先生に言われました。教室に落ちていた丸められたティッシュ、誰かが落としたであろう消しゴム。なんとなくしゃべんで拾うのが面倒で、そのうち掃除の人が片付けてくれるという理由をつけて、見て見ぬふりをしていたことに気が付きました。

今でも、落ちているゴミを見かけて、一旦面倒くささでスルーするものが多々あります。が、先生から聞いたあの言葉を思い出し、なんとなく罪悪感が湧いて拾うようになりました。この行動をすることによって、ほめてもらうことはなくとも、なんとなく自分がこれから、大事なときに見て見ぬふりをすることが無いように、引き止めている心地がするのです。

世の中には、私と同じくらいの年齢で犯罪
や非行に走り、将来を自ら潰してしまふ、あ
るいは無意識にそういった行為をするよう誘
導されてしまふなどの事例があり、何も出来
ない自分にやるせない気持ちになります。そ
んな人達を救うしていくために、私たちが
「見て見ぬふり」をしないことが大切だと思
うのです。この見て見ぬふりは、場合にす
ては大きな犯罪や非行につながるものです。
「関係があると思われない」「自分もそ

ういうことをする人間だと思われない」
「面倒事には巻き込まれたくない」そうい
た思考からうまれる見て見ぬふりが、人を孤
独に導いてしまうこと。これに気付けない
ば、これからもう一人苦しめ、吐き出す場所が
ないまま、犯罪や非行に走ってしまう人は絶
えません。

私たちは、人を偏見で判断してしまふこ
ろが少なからずあります。過去に犯罪や非行
をしたからといって関われると危ない人、と勝

手に思ってしまいませんか。その先入観で、その人がこれから変われるかもしれないという可能性を、私たちが潰してしまっているのかもしれません。それこそ、私たちはその人のことを「見て見ぬふり」をしていることになっ

ていると思うのです。犯罪や非行を減らしていき、社会を明るくしていくために、まずは周りが変わっていかなければ、当事者をいつまでも孤立に縛り、同じことを繰り返させてしまうかもしれません。

人。「見て見ぬふり」をしない人間になるために、変わる一つのきっかけとして、落ちていくゴミを拾ってゴミ箱に入れてみる。日常での些細な「見て見ぬふり」を減らすことで人と人が向き合い、犯罪や非行のない明るい社会を作っていけると私は考えます。

あの言葉を聞いたときからだいぶ時間が経ち、今や私は中学生。これから私が私の未来を潰してしまうなんてことがないように、無意識で人の未来を潰してしまうことのないよ

うに、今は日常の見て見ぬふりをなくしてい
くことを胸に、日々を過ごしていきたいと思
います。